

「かしこ」考

真 下 三 郎

樋口一葉の手紙である。

一

先日は御邪魔申上候。そのふし御話しの付録のこと、きのふ童子ぬしに逢ひ、物がたり合せしに、御同人は少しさしつかへありてお引受むつかしくとのこと。さるうへは又雑誌の御都合もあらせらるべく、もはや御承知かとも存じ候へども、先日の御返事までに右申上候。うもれ木原稿は一昨々日さし出し申候。御落手下されし哉。何も取あへず用事のみ。かしこ

樋口なつ子

藤本さま 御前に

末尾には「かしこ」という語が用いられている。「かしこ」はこの文例のように、書簡の文末を示す挨拶語であることは、人の知るところである。そして又、特に女性用語であると信じられていることも確かである。

「かしこ」は、「謹言」が漢語であるのに対し、国語である。というのは、「かしこし」という形容詞の語尾を省略したものといわれるからである。形容詞の省略形は、古代にはよく用いられた。「すくなし」（少なし）が「人ず

くな」のように「すくな」となり、「とほし」（遠し）が「とほのみかど」のように「とほ」となる、というように、形容詞のあるものに見られる現象であるから、不自然な形でない。

「かしこ」の原形の「かしこし」はおそらく「畏し」であろう。「畏し」は「おそれ多い」という意味の語である。だから「かしこ」が書簡形式の末尾に用いられたのは、男性の「謹言」や「敬具」などと同様に、名宛人に対する差出人の心持を表わすものである。

二

「かしこ」が使用されているのは、古代では単独でなく、主として「あな」という詠嘆を示す語とつらなっていて、「あなかしこ」という形で用いられている場合が多い。

「あな」が形容詞の語幹やその他の形についた「あな○○」の形はすこぶる多い。

阿那・於茂志呂（あな・おもしろ）古語拾遺

阿那・佐夜懃（あな・さやけ）古語拾遺

阿奈・乎加之（あな・をかし）新撰字鏡

鞆奈・瀨爾句（あな・みにく）神武紀

安名・太不止（あな・たふと）催馬楽

あな・なめ 遊仙窟

あな・にく 遊仙窟

あな・う 古今集 十八

あな・くら 枕草子

あな・かま 源氏物語・御法

「あなかしこ」も、これらと同様に盛んに用いられた。

え立てるまじき殿の内かな、あなかしこ、あなかしこと、しりへざまに居ざりしぞきて、（源氏物語・御幸）

うべかぐや姫の好もしがりたまふにこそありけれ、と宣ひて、あなかしことて、箱に入れたまひて、（竹取物語）

俊蔭涙を流して答ふ、あなかしこ、此の山をたづぬること、はげしきいはほむら出づるまで、けだもののはげしき中をわけ、（宇津保物語）

これらの例に現われている「あなかしこ」は、「あな」と「かしこ」との合成であることはいうまでもない。しかし診説ともいうべき異説が、古来行なわれてきた。たとえば塵添壻囊抄や下学集や齊東俗談などでは、「上代は家を作ることをせず、人々は穴居していたため、土中にいる恙虫が人を刺して病気になるしめた。それで居所の『穴をかしこく』閉じて、恙虫の出るのを防いだ」ことから、「恙を防げ、達者で居なさい」という意だとするのである。后宮名目抄によれば「惣じて祝詞の奥にむかしは唱え侍なり」として「上古の世、天照大神が天の岩戸から出でさせ給うた時、八百万の神たちが『あな』と感じ、『かしこ』すなわち『おそろしくうやうやしい』と感じ申して、祝い寿いだ。そのことばから出た」としている。

ともあれ「あなかしこ」は、「ああおそれ多い」「ああもったいない」などという意味にちがいないが、その意味だけでなく、強い詠嘆の「あな」に引かれて「かしこむ」意がつけ加わる。すなわち「ああおそれ多い（ああもったいない）、だから自分は十分つつしもう」というような自粛自戒の気持が含まれていることに注意しなければならぬ。こういう気持があればこそ、「謹言」と同じく、書簡の末尾に用いられたのであろう。

この「あなかしこ」は、準漢文体が流行するとともに漢字が当てられて、「穴賢」と表記されることもあるようになった。この表記は、かつて「準漢文体」（甲南国文第二十号）の章でも触れたように、国語の漢字表記法の一現象

であるから、鎌倉時代ころから現われる。

国の者など、おのつから落まうてくる事あらは、もてなして、よによに糸惜せさせ給ふへし……又小山の者共、いつれをも殊に糸惜しくし給へかし、穴賢々、

自是行たる者は、われを思はは、当時所知所領をしらす候とも、さやうの論をすへき様なし、件のさまだけ、止させ給ふへく候……委事は宗光かもちたる文に申たるなり、よろつ能く計沙汰すへし、穴賢々

(文治元年) 正月六日

源頼朝

委細之儀、承行事、以大輔禪師令申候、……万貴様期面謁之折候也、穴賢々々、(尊鎮親王)

……右依有数志、洪谷新兵衛尉時重授二千石畢、穴賢々々、莫輕莫輕、(世尊寺経尹)

数日又闇筆恐驚候、今春如何様にも参拝念願候、世上事無為之条、尤珍重候……老懶無益の物数奇をかしく候、条々期参拝候、穴賢々々、申させ給へ、(三条西実隆)

この「かしこ」は音韻転訛をして「かしく」となる。

三

「あなかしこ」の流行は、ついに書簡にまで及ぶ。その時代はいつごろから明らかでないが、平安時代の中期からの例が発見され、鎌倉時代(その一例が前記「東鑑」所載の頼朝の書簡である)を経て、室町時代になると、はなはだ多くなる。もとより「あなかしこ」は如上の意味であるから、男性もちろん使っている。したがって女性用語と考えることが謬説であることはいうまでもない。

なごりと宣はせたるこそ……恨めしう思ひたまへらるれ、よろづは今、候ひてなむ、あなかしこ、(源氏物語・

寄生木)

八月待つほどに、そこにびびしうもてなしたまふとか、世にいふめる、それはしも、うめきもきこえてむ、あなかしこ、(蜻蛉日記)

先日御返事委承候にき、抑あふかの庄事、なをなを親正にあつたふへく候、河北方を可預給候、親正にもさまでふかくの沙汰ハ、つかまつり候ハレ、又そのよしハみなめしおほせ候ぬ、たたとくとくあつたふへく候、こまかに半ちかまき申候へく候、あなかしこ、(後略)

(永治二年?) 三月六日

源(為義) 在判

あか松の律師、所りやうども、こなたに候を、そんちし候ハで、さがりがたき人どもにハからひて候、……………そなたさまにびんぎよき事候ハバ、いそぎ御ハからひ候べく候、あなかしこ(足利尊氏)

御法案御せいまことに数おほき事にて候に、とりどりの御ふぜい、御よぶんまでれききと、毎首申バかりなく存候、……公条卿もことのほか、ふせいもなき物どもみせ候事にて、せうしにて候、かたがたよく御心え候て御申入候、あなかしこ、(三条西実隆)

まことにあらたまり候春のしるしもかひあるめでたき、いよいよ天下をだやかに、国々おさまり、……………猶々つきし候ハぬ御祝ども、とく御まいり候て申され候と可申候、あなかしこ、(後水尾天皇)

蘭奢待の香、ちかき程は秘せられ候、今度ふりよに勅封をのべられ候ハバ、可為祝着候、此よしなを勧修寺大納言申上候べく候、あなかしこ、(正親町天皇)

仰のよしうけ給候ぬ、いよいよ御き嫌よくならせられ、めでたくぞんじ候、……………已刻伺公仕べきよし、かしこまり候、此よしよろしく御心得候て御さた頼入候、あなかしこ、(有栖川熾仁親王)

かくて「あなかしこ」は、手紙の末尾に用いられる語として定着してしまふ。はてははるか後世になるが、俳諧古選に、「冬ごもり虫けらまでもあなかしこ」(貞徳)とあるように、物事の最後を表わす語となってしまうのである。

る。

四

「あなかしこ」(穴賢)は書簡のどういう場合に使われたか。これについては、室町時代の「書札作法抄」に次のようにある。

一、主ノモトヨリ家人ノモトヘノ状ニハ、大略穴賢ト書、但謹言ト書人モアリ、武家ニハ如此ノ事家々ニ用ヰカヘタリ、オシナベテハ穴賢ト書タルヲバ難ズベカラズ、家子ニハ恐々謹言ト書ベシ、但家士モ人ニヨル事アレドモ大略ハ如此、

すなわち室町時代(およびそれ以後)では、家人に出す書簡は(おそらく和文脈であるが)「あなかしこ」を慣用したこと、男子の用いる「穴賢」は、もう一つの末尾の挨拶語「謹言」又は「恐々謹言」と匹敵する程度の語であったことなどがわかる。

この後者については、たとえば毛利輝元の書状を見ると、末尾を「恐々謹言」と書いたものもあれば、また「恐々かしこ」と書いたものもあって、両者はまったく同様に用いられていたことがわかる。

友田代官之儀、御方申談候間、宮嶋江御調不及申、陣夫以下之事、如前々……自然御油断之儀候者、取上不申候間、此者可申候、恐々謹言、(如寿寺宛) 輝元

栗備申趣承知候、於我等、内々不可有忘却之由、可被仰聞候、恐々かしこ、(下野守宛) 輝元

「あなかしこ」(あなかしこ)はやがて「あな」を落として、単に「かしこ」(かしこ)が書簡末尾の挨拶語として、普通一般に用いられる。

態染愚墨候、今日無御差合者、午時光臨所希候、……期面謁候也、かしこ (尊鎮親王)

此間者、久御見廻も不申入、致迷惑候、……源氏好御本被下次第、可写献候間、此よし能々申給へ、かしく、

(尊純親王)

自田舎之兩卷并尊翰而通被下候、畏入存候、……右自然致祇候可申上候、可預御心得候、かしく、(宗碩)

昨日之御能、終日見物候、役も出来候、不及申候、……一筆申候、尚使者可申入候、かしく、(細川幽斎)

尊書過分存候、然者山門恵光坊へ被仰遣候由、御尤二候、……隙入申候ハバ、重而日限可申入候、かしく、(桂

宮智仁親王)

先剋尊書拜見、忝奉存候、其刻对客故、昨日之醉裏者、狂歌清書遲延候、任賢慮如此候、委曲昌叱へ申候、かしく、(里村紹巴)

一日仰付られ候、くわんおんぎよう、ただ今進上申候、とくかき申候へ共、……このよし御つゐでの時分、しかるべきやうに御心え候て、御ひろう頼存候、かしく、(尊純親王)

院御所様よりとおはせられ候て、をう山第三年の御かうでん、銀子五枚下され候、……此よしいか程もよろしきやうに御心得候て申上られ可給候、かしく、(近衛尚嗣)

よべ申ごとく、此くれにかならずかならず期入存候、かならずかまらずまりを興行申入まいらせ候、……聊人にむかひて参て申入候、かしく、(後奈良天皇)

坊主にハまだならねども、ふたしたるはちをあくれれば、はちひらき也、あさましきまで旨候、……明後日脱炊以後、可有同心候、無壺之月すずしく候、かしく、(近衛信尹)

大閤へハ、けふは参候まじく候、宗和事、さ候ハバきつね候べく候、ばかされ候て、無念無念、かしく、(近衛信尋)

「謹言」は漢語の熟語であるから、漢字を主とする男性の書簡に用いられたが、「あなかしこ」(あなかしく・か

しこ・かしこ」は国語のかな書きであるから、和文の書簡の場合か、相手が女性か子供である場合に、用いられるのが似つかわしい。はたして、そのように書き示しているものがある。鎌倉時代の「消息耳底秘抄」に「女房許へノ消息事」として、女性宛ての書簡の書き方を説いた中で、

又仮名文ノ終ノ書止ヲバ、大旨穴賢々々と書也。

とあって、「穴賢」はかなの書簡に書くものだといっている。また「書札作法抄」には、子供へ出す書簡について女性宛の場合と比較して、次のようにいっている。

児ノ状ハ女ノ文ニ似タリトイヘドモ、真字ニ書時ハ恐々謹言ナドト人ニヨリテ書タルモ子細ナシ、文章ヲバ真字ニ書テ、アナカシクト書ンコトハ不相応ノヨシ申人アリ。

すなわち子供宛ての書簡でも、本文を漢字で書けば、末尾の挨拶語は「謹言」となるのが普通で、「あなかしこ」と書くのは不似合いだとしている。さらに、武家の書札札である「細川家書札抄」にも、次のようにある。

一、穴賢とも書候事人により文章による事歟。

穴賢之事略儀候歟。心安間などへは書候か。公家の御方には最略儀之由被仰候。時元なども左様に申候つ。

つまり武家の用いる「穴賢」は、心安い間柄の人ととりやりする書簡に書くものであり、公家方に対して使っては無礼になるといつている。改まった場合は「謹言」の類を用いるのである。

吉田神主兼豊進_三状於_三女中_二云々、末にあなかしこ、(園大暦、文和四年二月十一日)

もそうである。一条兼良の「桃花葉集」の中に「宛女房書状様」すなわち女房奉書の責任者たる勾当内侍に対しては、

……よし御心え候べく候、あなかしこ、

と「かしこ」を用いていることも、三光院実枝公の著といわれる「三内口決」に、「女房奉書之御請」の書き方を示して、

……かしこまりてうけ給候ぬ、なにに……このよし、よく御心へ候て、御ひろう候へかし、かしこ
と「かしこ」を用いていることも、みな女性との応答には「あなかしこ」「かしこ」を用いてしかるべき旨を示して
いるのである。

「かしこ」がなぜ女性にふさわしいか、いろいろ推察が加えられるが、まず「あなかしこ」「かしこ」が国語であ
って、和文の書簡に最も似つかわしいという点が考えられる。女性の書簡はほとんどみな和文である。かなの多い和
文であるから、女性は、おのずから末尾の語として、これらの語が使いやすいのであろう。女性には、元来「まな
(漢字) は女のこのむまじき事」といわれていた(乳母のふみ)ことは明らかである。

また男性も、女性に書簡を出す場合には、多く和文を採用したので、「謹言」よりも「かしこ」を使用したことも
考えられる。

かような点が、理屈でなくて感情や好みの面から、女性自身「かしこ」を専用するようになったと思われる。逆に
いえば、男性は、ついに書簡にかなを採用せず、漢字ばかりの準漢文体で書くようになったため、それにふさわしい
漢語の「謹言」を専ら用いるようになって、ついには男女による使用の区別が生じてしまったと考えられる。たとえ
ば次の例のように、同じ男性が書いても、漢字の多い書簡の場合は「謹言」を用い、かなの多い場合は「かしこ」を
使うといったものが多い。そして前者は対男性、後者は対女性(または対子供)の場合である。伊達政宗の例を掲げ
よう。

先度者、即御出于今、々々、帰次第候、昨日者、早々御残多候、明日者、登城可仕候間、其刻可申承候、恐惶謹言
二月廿九日 正宗

松右衛門尉人々御中

桜のいわねと候て、さうさう、文、殊更たるさかな、もくろくのごとく給候、誠幾久しくと敷々に御入候、めでた

くかしく、

まさ宗

五もじまいる

尚々こなたへよび申事、やがて日どりを可申候、おもてにゐるじゆ御座候て、あらあら申候、かしく、

五

「あなかしこ」（あなかしく）や「かしこ」（かしく）は、鎌倉時代ころから、ようやく女性の書簡の末尾専用の挨拶語としての姿勢をかためてくる。梶原景時室の書簡である。

こつのさう（木津庄）のこと、さりふみ（去文）ニハをよはぬことに候、ゐんせん（院宣）をはくたされ候うへには、た（誰）かささ（支）へ申候へき、かつはをうな（女）のみに候へハ、しさいしらぬことに候、ゆひそ（由緒）候はは、かちはら（梶原）もかまくら（鎌倉）とのにも申さたし候はんにも、そんし候はんをはしさいしらす、さりふみにをよはぬに、それに候はすとても、ゐんせんのうちには、たかささへ申候へき、いかにもくはからひさした候へし、あなかしこ

書簡の一変形と見られる譲状でも、女性が書く場合は和文でしたためられ、したがって「あなかしこ」で閉じられる。

わかさの国名田の庄のゐんの丁（庁）の御くたしふみ、国司の丁せん、くゑんともくして、ひめこせん（姫御前）にゆつりまいらせ候、この庄は相伝のりやう、つのくにのまの庄にかへて申たて候、ゐんせんに、しそん相伝してしるへしと候へは、またく他のさまたけ候ましく候、あまきみのいきて候はんかきりは、わかさをかせ給候やうに、ひとへにしらせさせおはしまし候へと候、又さたのものともさうの候ましく、かくれならぬことの日にそへて

まさり候ては、おのつからのこともそとて、かく申候なり、あなかしこ、

安元二年二月六日 あま（伊与内侍）はん

江戸時代になると、この傾向は決定的になる。元禄の合類節用集に、

穴賢、事出「旧事記」、今世婦人書翰末、必載「賢一字」、則是矣、（言辭門）

とあって、この間の状態を示している。

また宗長手記の、

女文かしこかしこと書き捨てて

とあるのもそれを裏付けるものである。

加賀の千代女の辞世の句と伝えられる次の句も、「かしこ」が女性の書簡の末尾語であるという性質を踏まえて、はじめて意味が徹底する。

月を見てわれはこの世をかしこ哉

かように江戸時代では「かしこ」は女性専用のようになってしまったが、そのかげには、書簡の指導書としてこの時代に何百と出版された「女用文章」の類が、その文例にほとんど「かしこ」（かしこ）を使って、「このように書くべし」と奨励したことも、大きな影響を及ぼしたと思われる。たとえば次のような文例である。

わざと一ふで染め参らせ候、そもじ様御気分あしく御座候よし、いかが、御心もとなく存じ参らせ候、定めて此ほどの寒気ゆへとすいし参らせ候、ずいぶん油断なく御薬まいり候かし、此さかな一折しんじ参らせ候、くハしくは御げんもじに申上げ参らせ候、かしこ、
（正徳二年三月、柏原屋板「女用智恵鑑」）

その他の女性の書簡を掲げよう。

あふせゝにかわる御ことばのすゑよりしては、心へがたふ候、そなたはかほどまで御なさけたふ身の、何とて

渺々しくそへうべしや、かしく、（芳野太夫）

身はうきくさのさそふ水にまかせ候へば、御うたがひはさる事ながら、あささふかき、ついにはかくれあるまじく候、かしく、（二代目高尾太夫）

六

「かしこ」（かしく）は種類がふえる。「めでたくかしく」「あらあらかしく」「草々かしく」などである。

「めでたくかしく」は書簡の内容がめでたい場合に用いられる。この表現は江戸時代にはじまったらしい。貞丈雑記によれば、次のようにある。

目出度かしくと女の文留様の事、京都將軍の頃までの古書古案じ等に見えず、とめはあなかしこと書くなり。めで度かしくと留る事、世の風俗となりしは御当代の事とおもはるる也。

以下「めでたくかしく」を用いた書簡を示そう。内容を見ると、いずれもめでたいものばかりである。

今日ハ御幸ニて御ざ候、かしく、めでたく存まいらせ候、うへさま御きげんよくならせ、忝、めでたく存じまいらせ候、猶御けざんにて申入まいらせ候、めでたくかしく、西第まいる（飛鳥井雅章）

一日ハはるばるとて御見参に入、御ミめよくしほらしく、御りはつに、御せいじんあそバし候を見まいらせ、御うれしく思ひまいらせ候、めでたくかしく、

さやうの御心ばへ御尤儀あそばし候へば、御手もはやくあがらせらるるよしにて候、めでたく又々かしく、（和久半左衛門）

仰のよしにて、文のやううけ給候、このごろはさえかへり候べく候へども、いよいよ御機嫌よくわたらせおハしまし候よし、うけ給り候て、めでたく、よろこびうけ給候、……猶ちかきうち、御社にまいりて申まいらせ候べく

候、いかほどもよろしく御沙汰候て、給り候べく候、めでたくかしこ、勾当内侍どのへ（近衛家熙）

豊臣秀吉が朝鮮に出兵した文禄の役の時、本陣にした肥前の名護屋に滞在中、すなわち文禄二年八月五日、淀君から男児出生の知らせを受けた。喜色満面の秀吉は、その児をまったく「ひろった」子の如きものとして、「ひろい」と名づけ、夫人の北政所に知らせたが、そういうめでたい書簡の末尾は、当然「めでたくかしこ」で結ばれる。

はやばやとまつり人おこし候事、まんぞくにて候、そもじよりれい申候べく候、さだめてまつりごをひろい候て、はやばやと申こし候間、すなわちこのなは、ひろいごと可申候、……やがてくがいぢん可申候、心やすく候べく候、めでたくかしこ、

次に「あらあらかしこ」と「早々かしこ」の例を掲げよう。

俄に秋かせの身にしむ様にておどろかれ申候、御かはりもいらせられずや、久しく時子様におめもし申上ず、いまだ御帰京遊ばされず候や、御様子御うかがひ申上候、別封相かはらずの物さし出し置候間、よろしき様に願度、例ながらの我まま御ゆるし下さるべく候、あらくかしこ

十七日

なつ

大はし様

前略御ゆるし下され度、陳ば国もとより俄の状参り、姉上お半どのの病気の次第に重り候由、右に付相談せねばかなはぬ事これあり候ゆゑ、御前様ならびに母ことともども取いそぎ参りくれよとの事に候間、此むね先生に御願ひ御暇いただき参られ候やう、至急申上候、早々かしこ

二十九年五月十三日

樋口 夏

樋口おくら殿

右は二通とも樋口一葉の書簡であるが、前者は久しく会っていない人の近況をたずねがてらに、出版社に原稿を送

った旨を知らせたもので、「あらあらかしこ」と書いた例、後者は国元へ病人見舞にいそぎ帰りたい旨を申し送ったもので、「早々かしこ」と書いた例である。

これらの書簡を書いた一葉は、博文館から出した「日用百科全書」の第十二篇にあたる「通俗書簡文」において、末尾の挨拶語について、次のうに解説している。

今も猶「めでたくかしこ」と書く人あり、こは道理（ことわり）たがへる由。正しくは「あなかしこ」と書くべきなれど、唯に「かしこ」としたるもよく、「早々」「あらあら」など添ふるは、文のさまによるなり。（文のかきやう）

「文のさまによる」とは内容如何によるということである。すなわち書簡の内容が用件の概略をざっと述べたような場合の末尾は「あらあらかしこ」と書かれ、内容がさししまった用件に終始しているような場合は「早々かしこ」となるのである。